

*****目次*****

P1	新副代表の挨拶	堂瀬 広幸
P2	仲間たちの近況報告 (1)	
	1 班	高井 茂光
	2 班	鈴鹿 絹代
P3	仲間たちの近況報告 (2)	
	3 班	寺尾 修
	4 班	濱田 嵯智子
P4	私の玉手箱	今本 芙佐子
P5	リレー随筆	山下 勝弘
	自由コーナー	前田 長治
P6	写真コーナー	張間 寛一
P7	樹形ウォッチング	遊上 眞一
P8	TOPIX 写真	根崎 明義
P9	絵画コーナー	中山 勝一
	//	玉尾ひとみ
	俳句・川柳	谷坂 修二

◇自然と文化だより◇

もう一年が過ぎようとしています。年齢を重ねるほど一年を短く感じますが、情報過多の昨今、情報を追うだけでも時間は過ぎていきます。時には自ら情報を作り、発することも必要かと思われまふ。それは作者の創造活動であり、植物で言えば花や実をつけることに相当するとも考えられます。本誌への投稿もそう考えていただければ有意義な作業ではないでしょうか。

来年も積極的に投稿お願い致します。

N.A



～新副代表のご挨拶～

今、思う事～

副代表 堂瀬 広幸

この時期に新副代表挨拶と言われましてもさて何を言うか？よく分かりません～全科員にとってはもう来期の意向調査が始まり希望進路、進退含めて決める季節に入りました。師走に入りますとこの頃一年がとても早く過ぎ去ろうとしていることに気がつき唖然とする次第です。その様な唖然とした中で今、思う事をつれづれに書いていこうと思います。

なぜ早いか答えは多忙の所為です！他の科は存知上げませんが当科は少し忙し過ぎるのではないかと思います。来年はもっと活動が増え、役割り負担も重くなるのではないかと想像します。個人にとってこれは、これで良いのです～と言う方もいれば少し速過ぎて付いて行けない、居心地が以前と比べてよくない等～思い、感じる方もいらっしゃるのではないかと想像いたします。

なにが言いたいのか申しますともっとゆとりを持った、年齢に沿った活動環境があってもいいのではないかなと思ったからです～そう考える人は私以外にも多分おられる筈です！

しかし、そういった処が有れば行けばいい！と仰る方もおられると思いますがそうでは無いのです！この科に入りいろいろと科に貢献し実績を積み上げ魅力ある科を創造した人たちです。また、そういった人たちは其々の地域でも活動を行っている方も多くおられるのも事実です。どちらを優先するかはお任せしますが現状を尊重する配慮も必要ではないかと考えます。

「人と自然の付き合い方を考察して10年」史を繙きますと当科はもっと多様性の持った組み立てにしてもいいのかなとも考えたりします。

何かそれに見合った相応しいプログラムを考える事は出来ないだろうか～等々～今、思っております。

ご挨拶とは程遠い話になりましたがどうかご寛恕ください。

了

余談

毎年四月には新たに数人の方が入科されます。その度に今年入科の若い人に、という表現が行き交いますがこれはとんだ思い違いです！昨今、定年齢の引き上げ、高齢者の雇用促進等社会は複雑に構成されており、今後入科される方は貴方より年上かも知れないのですからよくよく気をつけてご発言ください！お願いします。

N 花 見

1 班 高井 茂光

齢を重ねると、一年の経つのが実に早く感じられます。今日郵便受けを見ると「年末調整・確定申告用・大切に保管してください」と書かれた、生命保険控除証明書が届いていました。

え！もうそんな時期！と吃驚です。

であれば、年が明けるのも直ぐ、年が明ければ春は目の前、となれば。今花見の話をしても許されるのではないかな？そんな気持ちで書いています。

私がほぼ毎年桜の季節に訪れ、花見の穴場と思っている場所があります。おそらく来春も間違いなく、地域のメンバーや女房と訪れる事でしょう。

そこはわが家に近く、満開の時期を見計らって訪ねることができます。桜を愛でながらハイキングができ、人は少なく、時期が合えば土筆が採れる、お土産付の花見ができる絶好の場所です。

この春は一度目には、花がなく、改めて1週間後に訪ねて、見事な桜に巡り合ったところです。

写真はその時撮ったものです。

場所は、JR福知山線沿線の藍本から三田間の武庫川沿いです。今年は桜を愛でつつ、6時間かけて36000歩程歩きました。歩くのが苦手な方は広野から三田間を歩けば十分に満足のいく花見ができると思います。

日本には桜の名所が随所にあります。時間とお金をかけて名所に行くのも結構です。しかしそれが満足のいく花見となる保証はありません。

私も桜の名所高遠城をパック旅行で訪ねたことがあります。その時は既に桜の時期が過ぎていて、現地でビデオを見せられ、ビデオでの花見を初めて経験したという笑うに笑えない話があります。

今年訪ねて気がかりであったことは、てんぐ巢病に罹った桜の木が散見されたことです。この風景も長くはないのではないかと危惧されます。

興味のある方は、早めに訪れてみませんか。



木の装い

2 班 鈴鹿 絹代

本科生のとき、タテムク、ヨコエノキ、渦巻くケヤキと教わった。語呂合わせもよく、なるほどと感心していた。樹皮を見て種目を知る手がかりとなる。カゴノキも鹿の子模様で分かりやすい。

先日、年末も近づきそろそろ整理整頓を、と思っていたら本棚の片隅から幸田 文著の『木』という古い文庫本がでてきた。若い頃に読んだはずだが、内容は思い出せない。題名にひかれて開いてみると、平成4年出版で、木にまつわる15のエッセーが収められていた。

その中の1つに『木のきもの』というのがあり、次のように書いてあった。

「・・・木は着物を着ている。杉はたて縞、松は亀甲くずし、ひめしゃらは無地、イチヨウはしぼだっている、すすかけの木は織物ではなく染の美しさ、縄文杉は手織りの織物・・・」

イチヨウのしぼとはしわのことだが、樹皮を木の装いにたとえ、樹皮を着物に見立ててある。

昭和51年頃、幸田 文さんがこのような見方もふくめて自然観察を楽しんでいたことを知った。

樹木観察が今までより楽しくなりそうだ。



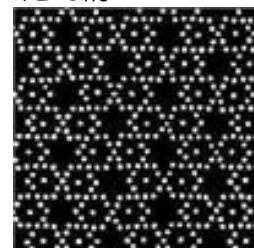
スギ



たて縞



マツ



亀甲くずし



イチヨウ



ヒメジャラ

毫碌のプレリユード

3 班 寺尾 修

「あれ出してや」、「うん」、「これと違うがな、いつも出してるあれやんか」、「なんやったかな?」・・・「いただきます」。内容こそ違え、我が家の朝食時によくある会話だ。老化による物忘れ防止を目的に入校したシニア自然大学校も4年目の半ばを過ぎてしまった。冒頭の会話のように目的を達成したとは到底思えない。植物観察会では「ああ、せやったな!」の繰り返し。ただ、少しは覚えたものもあるようだ。その影響もあり、我が家の庭では、この間にかかなりの変貌を遂げている。入校前には雑草、雑木として伐採・抜き取りをしていた植物が、その名を誇示すべく蔓延るようになった。秋には、ミズヒキの花が足元をくすぐり、コムラサキの果実が通路に張り出す。



片方では菊の鉢を席卷したランタナが咲き誇り、シソも食卓に乗るべく、ショウリョウバッタの侵害に耐えている。



当初は可憐な花や果実に癒され、食卓の潤いに感謝したものだが、今では各所に拡散している厄介者たちである。かつて大輪の菊や懸崖菊を育てていたのが嘘のようだ。菊はこのところ夏期に根腐れを起こすことが多く、昨今はほぼ諦めている。必ずしも温暖化に起因するものではなく、根気の欠落と、前述のような“雑草・雑木”たちの主張を許していることが主因であろう。ただ、菊には悪いがノスタルジーは感じていない。手のかかる菊栽培に没頭するような内向きな生活よりは、様々な楽しい機会が多い現状を肯定しつつ、健康な毎日を送りたいと思う。とりわけ活動後の“反省会”は続けていきたいものだ。主目的であった“老化による物忘れ”をも忘れながら。

「ドードーの歌」は聞こえない

迫りくる絶滅の時代に思う

4 班 濱田 嵯智子

7月、渡辺弘之先生のお誘いで、ボルネオ・クチンの野生保護センターを訪れる機会を得た。

今、ボルネオでは重機を導入して猛烈な勢いで森林が伐採されている。森林の消滅はそこに生きていた動植物の消滅を意味する。

8月9日の新聞は、「ボルネオ島のオランウータン、10年で25%減」と伝えている。

オランウータンのピーターの場合。密猟によってペットとして売られ、大きくなって捨てられた。森を知らず、仲間と暮らすすべを持たないピーターは一生、マタン保護センターのオリの中で生きることを強いられている。鉄格子から彼は何をみていたのか? 「この理不尽をどう思う?」そんな声が聞こえてきそうだった。

ジョージの場合。セメンゴ保護センターで半野生の暮らしをしていたが、ボスの座を狙って挑戦するも連戦連敗。ついに自信を無くし、心まで病んでしまった。野生なら群れから離れてほかの森へ行くのだが、町に囲まれた森からは出ていけない。彼もまた、マタンへ送られ、オリの中で今日も精気なくうずくまっている。

「島の生物は進化し、絶滅する。」保護センターは、まさに陸の孤島なのだ。保護センターは野生生物本来の生息地ではない。そして、その生息地はもはやほとんどが消滅させられている。

最近読んだ「ドードーの歌」に「種分化の停止」という言葉があった。「今世紀には熱帯の大きな植物および陸生脊椎動物は重要な進化を停止するだろう・・・未開の土地が世界的に減少していること、地球はしだいに大型の動物や植物が不毛になっていくだろう。」と。そして、「地球が過去5回経験した大量絶滅に匹敵する絶滅の一つを我々は今、経験している。」と。

阿川佐和子との対談で福岡伸一が「人間はやがて急速に廃れていくだろう。人間ほど適応能力を失った生物はいない。人間の化石が示準化石になる時代が来る。」と言っていたが、地球の歴史から見れば、そういうまっただ中に私たちは今、暮らしているのかも知れない。

150年も前、すでにウォーレスは警告している。「すべての生きとし生ける物は人間のために作られたのではないと知るべきである。」

永楽館と出石一人々との触れあい

1 班 今本 芙佐子

歌舞伎を見る時にいつもする様に双眼鏡で舞台を見て思わず双眼鏡を落としそうになった。愛之助の顔がアップで迫って来たのである。話には聞いていたがこれほど舞台と客席が近いとは、実感するまで分からなかった。一階の最後尾の席でこれである。役者の息遣いまでが聞こえるようである。花道が真横にあったのだが、本当に手が触れそうで、役者が通った時には、思わず手を出して触りそうであった。これが永楽館の歌舞伎である。これが古い芝居小屋の魅力である。

11 月初めに、出石の永楽館に歌舞伎を見に行った。歌舞伎は以前から、大阪や京都でよく見ているのだが、永楽館は、電車で簡単に行ける所ではないので、今まで延び延びになっていたのだ。やっと念願がかなって、幕が上がったその第一印象である。



永楽館は明治 34 年に開場した近畿最古の芝居小屋であったが、芝居小屋として使用されなくなり、昭和 48 年には閉鎖されていた。それが「但馬の小京都」と言われる歴史ある城下町出石の街並み保存の一環として、復元されて 10 年になる。

古い芝居小屋としては四国金比羅さんの金丸座が有名である。この復興は大成功で、切符を取るのには至難の業である。この成功を真似て古い芝居小屋がかなり復元されたが、続けて営業しているのは金丸座と永楽館だけだそうである。これは劇場を復活することが大変な事である以上に、これを維持していくことの大変さを物語っている。金比羅さんにしても出石にしても地元の人々の熱い思いと協力無しには続けることは出来ない事である。

古い芝居小屋としては四国金比羅さんの金丸座が有名である。この復興は大成功で、切符を取るのには至難の業である。この成功を真似て古い芝居小屋がかなり復元されたが、続けて営業しているのは金丸座と永楽館だけだそうである。これは劇場を復活することが大変な事である以上に、これを維持していくことの大変さを物語っている。金比羅さんにしても出石にしても地元の人々の熱い思いと協力無しには続けることは出来ない事である。

永楽館では毎年片岡愛之助を座長とした歌舞伎が約 1 ヶ月上演されている。若い役者が中心なので外題もよそでは見られない物や、古い作品を復興したりと色々挑戦している。今回の出し物は、十周年を記念して、永楽館の館名の由来にもなっている永楽銭を家紋に用いた、出石藩のお家騒動を題材にした「仙石騒動」である。地元に関係ある芝居なのでいやが上にも盛り上がっていた。

永楽館では、歌舞伎俳優さん達は勿論熱心に取

り組んでいるのだが、出石の地元の人々の歌舞伎上演に対する取り組みが素晴らしい。二階の窓の開け閉めは人の手で行われるのだが、これも地元のボランティアの人々の手で行われている。また、弁当殻やゴミ集め、会場案内はもちろん、地元の人である。舞台装置に関する事も近代劇場と違って、人の手で行われることが多く、それもボランティアが活躍している。

さらに、今回は芝居の中の盆踊りの場面には地元の人々も踊り手に扮して出演するなど、いかにも町全体で取り組んでいることがひしひしと感じられた。お客さんの出迎え案内、お土産（地元の産物）売りなどすべて地元のボランティアの協力で行われていて、皆さんの本当に暖かい思いと、一所懸命さが伝わってきて、それだけで胸が熱くなる思いがした。今回は一緒に行った人が車いすを使用していたのだが、段差のある（古い劇場を復元しているので当然バリアフリーではない）所を数名の人で持ち上げ、わざわざ見やすい席を用意していただいた（おかげで私達も花道横の見やすい席であった）。

芝居終了後、出石名物のそばを食べに行き、帰りに車いすを押してバスのところに戻ったのだが、途中、ちょっと道に迷ってしまった。丁度通りかかった女性が親切に道を教えてくださり、途中まで送ってくださった。この方は 80 歳を越えているとのことであったが、歳とは思えない元気な方で、地元の事をいろいろ教えていただき、特に地元の素晴らしさを熱を込めて話された。出石を愛している思いが伝わって来た。町で会う人々の多くがこのような方々であった。

故郷創生で古い物を復興して観光資源にすることは多くのところで試みられていて、それは素晴らしいことである。しかしそれが成功するかどうかは、そこに住んでいる人々の気持ちが伴わなければ、長続きはしないと思う。「おもてなし」という言葉が流行ったが、形だけ、言葉だけでは本当の「おもてなし」にはならない（実は私はこの言葉に白々しさを感じているのだが）。人々の心こそが本当の「おもてなし」であると感じた。

永楽館での歌舞伎にも感動したが、もっとも心を打たれたのが人々の心であった。

「もう、だって は禁句、命は時間」

3 班 山下 勝弘

近年、紅葉が遅くなっていると聞く、これも温暖化の影響だろうか、しかし、今年の紅葉は美しい。先日、JR 富田駅から北摂の山にバスで 25 分程の萩谷集落で緑の歩学



一乗寺のクスノキ

(高槻の古木、保護樹木観察会)を実施して、参加者と一緒に秋の一日を楽しんだ。

これはネイチャーたかつきが取り組む活動で、高槻市の公民館が市民を対象として、健康作りに巨木を巡るコースです。3 年間で、高槻市の指定保護樹林地区 21 カ所、保護樹木 28 本を中心に観察する。残すは 3 コース、来年 3 月に終了予定である。私も 3 コースを担当して、コースを数回下見し、樹木と地域の史跡を調べて、資料を作るのに苦労したが、知らなかった高槻の歴史を少し勉強が出来て、住んでいる高槻が身近になった。

その一部を紹介すると、萩谷公民館・萩谷分校の沿革は、明治 9 年にお寺の本堂で創立、明治 23 年萩谷尋常小学校、明治 27 年神服尋常小学校分校に、その後、小学校が新たに設立される毎に、4 回も他の小学校の分校になって、平成 9 年に最後の南平台小学校の分校として閉校になる。分校の沿革から高槻市の人口増加の様子を垣間見ることが出来る。

また、大阪医科大学の歴史資料館はウィリアム・メレル・ヴォーリズの設計で国の登録有形文化財である。そして、同じ校内に 1939 年に在った京都帝国大学工学部化学研究所で桜田一郎教授によってビニロンが初めて開発された。北朝鮮もビニロンを開発したと主張している。実は、京都帝国大学化学研究所時代の李升基助教授も開発者の一人。治安維持法で逮捕後、北朝鮮へ渡り核兵器開発を指揮、寧辺核施設初代所長に就任している。次に、一乗寺には高槻随一のクスノキの巨木がある。樹高 29m、幹周 7.54m 樹齢 600 年「弁経の駒繫ぎ」と云われている。

ボランティア活動を通じ、ボケ防止と健康寿命を延ばせる様に、何事にも興味を持って「もう、だって」を禁句に、「命は時間」と心し、日々を過ごしたいと思う。

高野山町石道登山

3 班 前田 長治

昨年の 8 月に当科の活動で、九度山に行き、初めて町石道があることを知り、本年の 10 月 16 日、17 日で往復することを計画し、実施した。その報告をします。雨天でしたが、決行しました。9 時半に九度山駅に集合し、6 名で出発した。全員登山経験者なので、雨具は万全で、傘を差して出発した。10 時 15 分に 179 町から出発した。180 町は、慈尊院の階段の上にあったので、スルーした。そのためか、165 町手前の展望台までがレインコートのお陰で蒸し暑く、私を含む 2 名が若干のばて気味、展望台で休憩し、傘があるので、レインコートを脱ぐ、周辺は柿木畑であった。136 町の六本杉の所で 12 時前になったこととシャリバテのため、立っての昼食を提案するもメンバーに却下され、仕方なく 121 町の展望台を目指すことにした。道は雨で沢になっていた。ようやく展望台に到着し、昼食を摂った。12 時 55 分に出発した。ここまでで 60 町を約 2.5 時間かかったことになり、到着は 5 時間以上かかり、18 時到着が予想されまた、60 町の矢立からは登りになることが、予想されたので、矢立には、遅くとも 15 時には、着くことを目標にアップテンポにした。幸いここからは、比較的平坦であったこと、私のシャリバテが解消され、111 町の所に神田地蔵堂や集落があり、トイレもあり、気分によとりがで、14 時 50 分ごろに 60 町の矢立に着し、トイレ休憩等で大休憩した。

これなら、17 時には、大門には到着が出来ると確信をもった。相変わらず、雨模様である。途中には、袈裟掛石や押上石など、弘法大師ゆかりの史跡を見ながら歩を進めた。道は一部沢状態であった。ここも平坦道であり、後半に急傾斜があると予測しながら歩を進めた。20 町位から、傾斜がきつくなった。道路に出て、大門に着した。17 時ちょうどであった。ただし、ここは 7 町であり、1 町ではない。気温は 12.4℃であった。防寒着を着て、1 町及び宿坊を目指す。ここから宿坊まで、1.5 km で誰も無口になり、進む。翌朝は、奥之院に参拝し、他のメンバーと合流し、矢立経由紀伊細川駅までとした。金剛峯寺を 12 時に出発し、駅には 15 時に到着した。2 日間での歩行距離は約 40 km となった。やはり登山は天候次第を痛感した。往復は達成出来ずでした。



川鵜の羽干し(武田尾・武庫川)



フクラスズメの幼虫



アケビコノハの幼虫



クスサンの幼虫



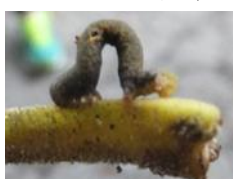
アサギマダラ



ウスキツバメエダシャク



オオケマイマイ



シャクトリムシ



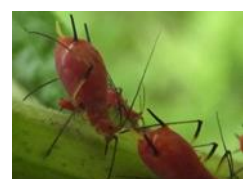
カメノコテントウ



ラミーカミキリ



イナゴ



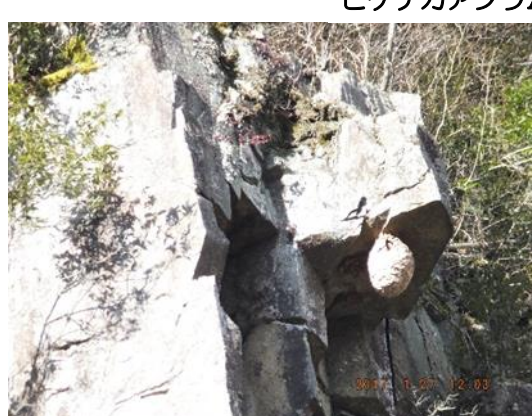
セイタカアワダチソウ
ヒゲナガアブラムシ



桜の園入口番の熊?



桜の園の道番の熊?



スズメバチの巣(対岸：西の崖上)

◆◆◆ 鳥足状複葉の秘密 ◆◆◆

4 班 遊上 眞一

複葉には、羽状複葉や三出複葉、そして葉柄の先端一か所から 5 枚以上の小葉が出る掌状複葉などがありますが、ヤブガラシの葉は鳥足状複葉というちょっと変わった形をしています。どうしてこんな形になったのか秘密を覗いてきました。



ヤブガラシは、鳥足状複葉



コシアブラは、掌状複葉



今年の 10 月に雲雀丘でいろんな形のヤブガラシがあるのが目に留まりました。これは三出複葉のヤブガラシ。

よく見ると側小葉の下部が分裂しかかっています。

三出複葉の側小葉が 2 つに分かれて 5 枚葉になったので、鳥足状となったのでしょう。



これは 4 裂のヤブガラシ。
右側の側小葉は分裂しかかっていますが
左側の側小葉は既に分裂しています。



これは単葉のヤブガラシ。
これから分裂しようと切れ目が走っています。

「ワクワク自然工作」（テントウムシとクリスマスツリー）

3班 根崎 明義

今年は17番ブース



開始前、受付にこの人数



受付は材料準備の内職も



老若男女勢揃い



テントウムシはマンツーマン



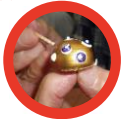
家族三人



姉妹？



二人羽織



下準備も
大忙し



時間待ちでーす



在庫切れ材料も



終了時間過ぎました



来場者数
557 名
(内子供 284 名)

最後まで席の空く
ことなく、客が続
きました。

スタッフ数：61 名

大仏池

1班 中山 勝一



メリークリスマス

2班 玉尾 ひとみ



俳句・川柳

4班 谷坂 修二

阪大病院にて

病窓の紅葉と共に痛み落つ

紅葉は色消えて朝日映え

院食の米粥美味しく感じられ

自然と文化だより
皆様のご協力により35号が発
行出来ました。有難うございま
した。(広報委員会)